

令和4年度 日本大学危機管理学部 個人研究費 研究実績報告書

所属：危機管理学部 危機管理学科

資格：准教授

氏名：加納 奈保子

<p>研究課題名</p>	<p>19世紀アメリカ女性作家による東洋思想の受容とその影響についての研究 19世紀アメリカ文学における「ケアの倫理」の研究</p>
<p>研究目的及び 研究概要</p>	<p>令和3年度の個人研究費は、前年度に引き続き、米国で初めて仏教の翻訳を出版したエリザベス・ピーボディの著述における東洋思想の表象に注目し、米国女性が東洋思想の受容を牽引していた背景を考察することを目的とした。 また、19世紀アメリカ文学における「ケア」の表象についても研究を進めている。ケアの倫理 (ethics of care) は、フェミニスト心理学者のCarol Gilliganを嚆矢として、社会学、政治学、倫理学等の分野で研究されてきており、ここ数年で、文学研究においてもケアの視点から論じた研究が徐々に見られるようになってきているが、アメリカ文学における分析はほとんどなく、研究を進める意義があると考えられる。</p>
<p>研究実績の概要</p> <p>研究の進捗状況・得られた成果・今後の課題・研究実績等</p>	<p>本年度の研究成果として、東洋思想に接近するに至った言語観についての分析を進めたことで、日本大学英文学会4月例会にて「Elizabeth Palmer Peabodyの東洋思想の受容と言語観」というタイトルで口頭発表を行った。また、8月には、ボストンにて文献調査を行い、日本では閲覧不可能であった閉架資料等にアプローチすることができた。文献調査の報告として、日本大学英文学会「英文学会通信」に「私の研究生活——9年振りのボストン滞在を振り返って」を掲載した。次は論文として刊行することを目標とした。 また、本年度のもう一つのテーマであった19世紀アメリカ文学における「ケアの倫理」の表象については、口頭発表だけでなく公開講座でも発表することができ、順調に研究を進めることができたと言える。5月には、日本ナサニエル・ホーソーン協会全国大会において「弱さと悲哀をたずさえて——『緋文字』における「ケアの倫理」」というタイトルでホーソーン作品における「ケアの倫理」を考察し、発表した。報告として、「Embracing "Frailty and Sorrow": The Ethics of Care in <i>The Scarlet Letter</i>」を<i>Newsletter</i>に掲載した。さらに、「ケアの倫理」という視点の重要性を広く共有するため、11月には公開講座を担当し、令和5年3月には「『同志少女よ敵を撃て』から考える危機管理と「ケアの倫理」」と題した口頭発表を学内学会で行った。今後はこれらを論文として刊行したい。</p> <p><b>【口頭発表】</b></p> <p>① 「『同志少女よ敵を撃て』から考える危機管理と「ケア」の倫理」日本大学危機管理学部学内学会 (2023年3月16日 日本大学危機管理学部)</p> <p>② 「文学から考える「ケア」の重要性と政治性」日本大学危機管理学部公開講座 (2022年11月6日 日本大学危機管理学部)</p> <p>③ 「「弱さ」と「悲哀」をたずさえて——<i>The Scarlet Letter</i> における「ケアの倫理」」日本ナサニエル・ホーソーン協会第40回全国大会 (2022年5月20日 日本ナサニエル・ホーソーン協会)</p> <p>④ 「Elizabeth Palmer Peabody の東洋思想の受容と言語観」日本大学英文学会4月例会 (2022年4月16日 日本大学英文学会)</p> <p><b>【発表要旨 (Abstract)】</b></p> <p>① “Embracing “Frailty and Sorrow” : The Ethics of Care in <i>The Scarlet Letter</i>,” <i>MHSJ Newsletter</i>, vol.40 (2023. 2)</p> <p>② 「文学から考える『ケア』の重要性と政治性」『危機管理学研究』第7号 (2023年2月)</p> <p>③ 「私の研究生活——9年振りのボストン滞在を振り返って」『英文学会通信』第118号</p>